

ロールシャッハ人間運動反応の「型」に関するノーマティブ・スタディ(ロールシャッハ運動反応に関する文献抄録集)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1267

し、SCについては、時間評価との相関が認められず、この点はKurzらの所見とは一致しなかった。

木場深志 1968 (b) 父親および母親に対する感情とロールシャッハ第IVおよび第VIIカードにおける人間運動反応との関連 宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」, pp. 110 - 115.

ロ・テストの父親カード・母親カード仮説の吟味。Sの父親（母親）についての作文から、父親（母親）に対する感情が陽性か陰性かを評定し、第IVカード（第VIIカード）に対するM反応の特徴（量と質）との関連性をしらべた。Sは男子高校生120名で、結果は、両者の間に予想したような関係を見出すことができなかった。

木場深志 1971 ロールシャッハ人間運動反応の「型」に関するノーマティブ・スタディ。金沢大学法文学部論集，哲学篇，19, 41 - 61.

M反応の型に関する基礎的標準資料を呈示する目的で、分裂病100名、神経症50名のM反応計410個を対象とし、判定者2名が分類した伸張M、屈曲M、阻止Mについて、カード別・領域別及び疾患別の出現率を求めた。伸張Mは、M反応全体の60%と圧倒的に多いが、屈曲Mは16%に過ぎず、この知見ぬきに個人のMの型を論ずることに疑問が出された。

木場清子 1968 ロールシャッハ・テストにおけるM反応の型とMMPIとの関係。宮孝一教授還暦記念論文集刊行会編「ロールシャッハ運動反応の研究」pp. 116-122.

神経症患者、精神分裂病患者各30名をSとしてTaulbee論文（1961）とEndicott論文（1964）の矛盾を検討した。屈曲MとMMPIのD及びPt尺度との関係を調べたところ、神経症では無相関、分裂病ではPt尺度にのみ低い相関がみられた。相関係数の大きさは、前記2者の中間の値を示し、どちらかといえば、Taulbeeを支持する結果と解された。

菊池哲彦 1965 ロールシャッハ・テストにおける「人間運動反応」についての一考察。茨城大学文学部紀要（人文科学），第16号，21-34.

M反応成立に関与する認知的変数をとり扱ったWernerたちの実験、更にこれを発展させたSinger一派の人格的要因に関する諸研究を概観した後、ロ反応に及ぼす薬物効果（アマタール、アルコール、ラボナ等）の知見をまとめた結論として、人格的統御機能の低下がM反応を増加させる内的要因の一つであることを指摘している。

King, G. F. 1955 Rorschach and Levy movement responses : A research note. *Journal of Clinical Psychology*, 11, 193 - 195.

Levy 運動図版が原版と同じ運動反応機能を測定しているか否かを検討。原版でMの多い者はLevy 図版で(1)拒否が少ない、(2)反応時間が短い、という仮説をたて、男子入院患者（神経精神科）100名の資料について検討したが、仮説は支持されなかった。このような結果をもたらしたのは、Levy図版での教示が原法と異なっているためと解された。

King, G. F. 1958 A theoretical and experimental consideration of the Rorschach human movement response. *Psychological Monographs*, 72, No 5 (Whole No 458)

Mの新しい解釈仮説として、Mが「対人交渉の時空に自己を投射する空想能力」をあらわすと考え、これを精神病患者群について検証した。100名の患者の中からMの多い群、Mの少ない群各30名を選び、年齢・知能・診断種別などは等質にした。患者の病気・病因に対する態度を比較した結果、上の仮説は支持された。

King, G. F. 1960 An interpersonal conception of Rorschach human movement and delusional content. *Journal of Projective Techniques*, 24, 161 - 163.

前論文（1958）のMに関する解釈仮説の実証。妄想型分裂病患者で対人妄想をもつ者は身体的妄想をもつ者よりMが多いという仮説をたて、対人妄想をもつ者と身体妄想をもつ者を年齢・教育・言語量・Rで個別にマッチングした14組についてMの個数を比べた。14対のうち対人妄想の方がMが多いのは11組、同数2組であり、仮説は支持された。

Klein, A. and Arnhem, R. 1953 Perceptual analysis of a Rorschach card. *Journal of Personality*, 22, 60 - 70.

Arnhem (1951)のあとをうけて、ロ・テストの第Iカードの知覚的特徴について分析を加えたもの。第Iカードの全体的な図形構成、下位部分の区別と諸種の部分のまとまり、形態特徴とバランスなど、とくに運動反応の成立を促進する形態的特徴について分析している。

Klein, G. S. and Schlesinger, H. J. 1951 Perceptual attitudes toward instability :I. Prediction of apparent movement experiences from Ror-